

悠久の河

5

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

幻

村の者は家正に敬愛の念を抱き、感謝した。家正は、やっと歩けるようになつた彌兵衛を自分の懷に入れて抱き、毎日のように意宇川の堤防を見回った。

「のう、彌兵衛。村の民、百姓が生き生きと働くのを見るのは良いものじや。早く大きくなれよ」家正は幼い彌兵衛に語りかけた。そして、田んぼで農作業をしている村人たちに語りかけた。

「精が出るのお。子や孫が安心して暮らせる村を作るのが、わしらの役目だ。励んで下されよ」「へいへい、そりゃあもう。わしらが安心して仕事に精を出せるのは、みんな庄屋さまのお陰ですけに」

村人たちは、申し合わせておいたようにそう答えた。

「なにやら空模様がおかしい。雲の走り方が尋常でない。風も出て來た。彌兵衛、急ぐぞ」「おじいさま、もう少し、ここにいては、いけませんか?」

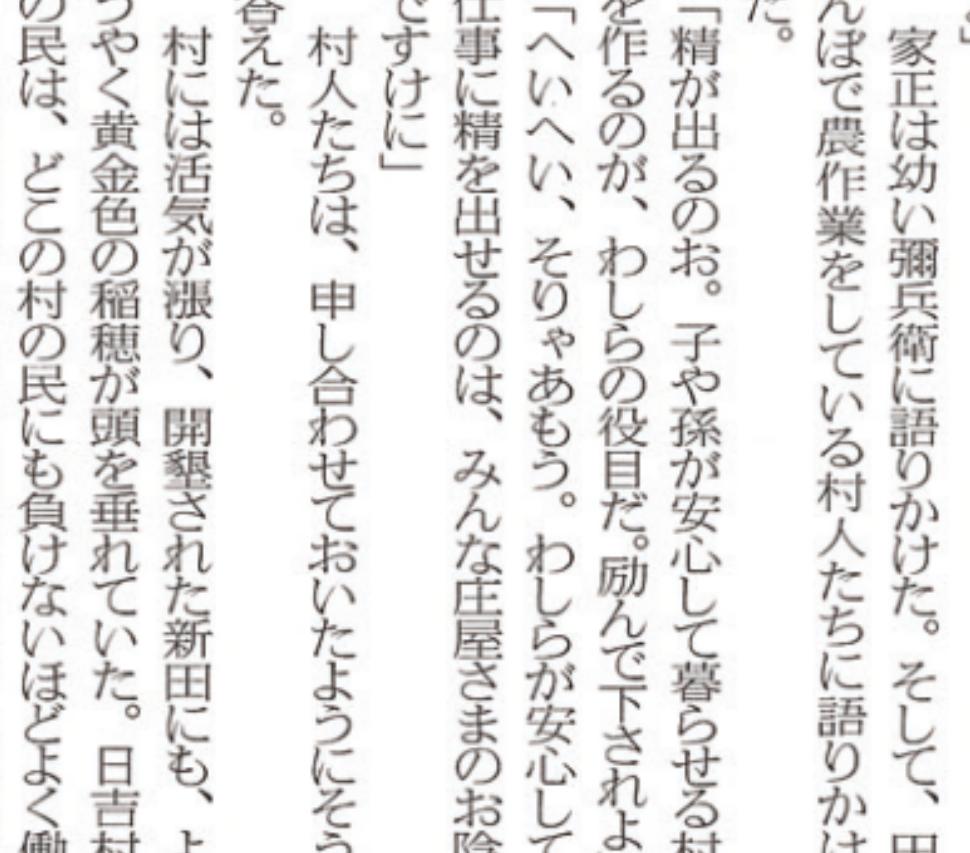
「なにやら、いつもと違う。胸騒ぎを覚えてならん。彌兵衛、急ぐぞ」

家正は幼い彌兵衛を抱き上げると、小走りになり、家路を急いだ。

家正の悪い予感は的中した。お盆を前にして、まる二昼夜、激しい雨が続いた。

増水した川の水は濁流となり、新しい意宇川の土手を越し、旧河川に築かれた堤防をも破壊した。百姓たちの、つい先程までの細やかな夢も一瞬のうちに幻と消え去つた。日吉村の民は、ただ、呆然と立ち尽すのみだった。

実りの無い、辛い復旧作業の中で、気持のやり場の無い民、百姓たちは、手の平を返したようにな不平や不満を露骨にぶちまけた。「庄屋の旦那が意宇川の普請など思いつきながらかつたら、こんな酷いことにならんかったのに…」



画 高田勲